

## 舞姫

森 鷗外



石炭をばはや積み果てつ。中等室の卓のほとりはいと静かにて、熾熱灯の光の晴れがましきもいたづらなり。今宵は夜ごとにここに集ひ来る骨牌仲間もホテルに宿りて、舟に残れるは余一人のみなれば。五年前のことなりしが、平生の望み足りて、洋行の官命をかうむり、このセイゴンの港まで来し頃は、目に見るもの、耳に聞くもの、一つとして新たならぬはなく、筆に任せて書き記しつる紀行文日記ごとに幾千言をかなしけむ、当時の新聞に載せられて、世の人にもてはやされしかど、今日になりて思へば、幼き思想、身のほど知らぬ放言、さらぬも尋常の動植金石、さては風俗などをさへ珍しげに記ししを、心ある人はいかにか見けむ。こたびは途に上りしとき、日記ものせむとて買ひし冊子もまだ白紙のままなるは、ドイツにて物学びせし間に、一種のニル・アドミライイの氣象をや養ひ得たりけむ、あらず、これには別に故あり。

げに東に帰る今の我は、西に航せし昔の我ならず、学問こそなほ心に飽き足らぬところも多かれ、浮き世の憂きふしをも知りたり、人の心の頼みがたきは言ふもさ

らなり、我と我が心さへ変はりやすきをも悟り得たり。昨日の是は今日の非なる我が瞬間の感触を、筆に写して誰にか見せむ。これや日記の成らぬ縁故なる、あらず、これには別に故あり。

ああ、プリンデイシイの港を出でてより、早二十日あまりを経ぬ。世の常ならば生面の客にさへ交はりを結びて、旅の憂さを慰め合ふが航海の習ひなるに、微恙にことよせて房の内にのみ籠もりて、同行の人々にも物言ふことの少なきは、人知らぬ恨みに頭のみ悩ましたればなり。この恨みは初め一抹の雲のごとく我が心をかすめて、スイスの山色をも見せず、イタリアの古跡にも心をとどめさせず、中頃は世を厭ひ、身をはかなみて、腸日ごとに九廻すとも言ふべき惨痛を我に負はせ、今は心の奥に凝り固まりて、一点の翳とのみなりたれど、文読むごとに、物見ること、鏡に映る影、声に応ずる響きのごとく、限りなき懐旧の情を呼び起こして、幾度となく我が心を苦しむ。ああ、いかにしてかこの恨みを銷せむ。もし他の恨みなりせば、詩に詠じ歌による後は心地すがすがしくもなりなむ。このみはあまりに深く我が心に彫りつけられたればさはあらじと思へど、今宵はあたりに人もなし、房奴の来て電気線の鍵をひねるにはなほほどもあるべければ、いで、その概略を文に綴りてみむ。

余は幼き頃より厳しき庭の訓へを受けし甲斐に、父をば早く失ひつれど、学問の荒み衰ふることなく、旧藩の学館に在りし日も、東京に出でて予備費に通ひしとき

森 鷗外 一八六二(文久二)―一八九二(大正一一)年。小説家・陸軍軍医。島根県生まれ。一八八四年、ドイツに留学。公務の傍ら多彩な文学活動を展開し、日本近代文学の形成に貢献した。小説に「雁」「洪江抽斎」、翻訳にアンデルセン「即興詩人」などがある。この作品は一八九〇年に発表されたもので、本文は「鷗外全集」第一巻によった。

- 1 熾熱灯 白熱電灯のこと。
- 2 いたづらなり 無駄である。役に立たない。
- 3 骨牌 カード。トランプ。
- 4 セイゴン サイゴン。現在のベトナムのホーチミン。
- ※ 日ごとに幾千言をかなしけむ 毎日幾千のことばとなっただろうか。
- 5 動植金石 動物・植物・鉱物。

- ※ 心ある人はいかにか見けむ 思慮分別のある人はいかのように見たらうか。
- 6 ニル・アドミライイ 何事にも動かされないこと。外界に左右されない態度・精神。「ラテン語」nil admirari
  - 7 氣象 気性。氣質。
  - 8 憂きふし つらい事柄。
  - 9 言ふもさらなり 言うまでもない。
  - 10 プリンデイシイ アドリア海に臨むイタリア南部の港。プリンディジ。
  - 11 生面 初対面。
  - 12 微恙 ちよつとした病気。
  - 13 腸日ごとに九廻す 心の苦しきもだえらさま。

- 14 銷せむ 消そう。
- 15 房奴 船室のボーイ。
- 16 いで さあ。どれ。
- 17 庭の訓へ 家庭での教育。
- 18 旧藩の学館 藩校のこと。
- 19 予備費 東京大学予備門。旧制第一高等学校の前身。

〔洋行〕〔官命〕〔放言〕〔惨痛〕〔懐旧〕〔概略〕

も、大学法学部に入りし後も、太田豊太郎といふ名はいつも一級の首に記されたりしに、一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし。十九の歳には学士の称を受けて、大学の立ちてよりその頃までまたなき名誉なりと人にも言はれ、

某省に出仕して、故郷なる母を都に呼び迎へ、楽しい年を送ること三年ばかり、

官長の覚え殊なりしかば、洋行して一課の事務を取り調べよとの命を受け、我が名を成さむも、我が家を興さむも、今ぞと思ふ心の勇み立ちて、五十を越えし母に別るをもさまで悲しとは思はず、はるばると家を離れてベルリンの都に來ぬ。

余は模糊たる功名の念と、検束に慣れたる勉強力とを持ちて、たちまちこのヨオロツパの新大都の中央に立てり。なんらの光彩ぞ、我が目を射むとするは。なんらの色沢ぞ、我が心を迷はさむとするは。菩提樹下と訳するときは、幽静なる境なるべく思はるれど、この大道髪のごときウンテル・デン・リンデンに來て両辺なる石畳の人道を行く隊々の士女を見よ。胸張り肩そびえたる士官の、まだウイルヘルム一世の街に臨める窓に倚りたまふ頃なりければ、様々の色に飾りなしたる礼装をなしたる、顔よき少女のパリまねびの粧ひしたる、かれもこれも目を驚かさぬはなきに、車道の土瀝青の上を音もせで走るいろいろの馬車、雲にそびゆる楼閣の少しとざれたる所には、晴れたる空に夕立の音を聞かせてみなぎり落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮かび出でたる凱旋塔の神女の像、このあまたの景物目睫の間に集まりたれば、初めてこ

こに來しもの応接にいとまなきもうべなり。されど我が胸にはたとひいかなる境に遊びても、あだなる美観に心をば動かさじの誓ひありて、つねに我を襲ふ外物を遮りとどめたりき。

余が鈴索を引き鳴らして謁を通じ、公の紹介状を出だして東來の意を告げしプロシアの官員は、みな快く余を迎へ、公使館よりの手つづきだに事なく済みたらましかば、何事にもあれ、教へもし伝へもせむと約しき。喜ばしきは、我がふるさとして、ドイツ、フランスの語を学びしことなり。彼らは初めて余を見しとき、いつくにていつの間にかくは学び得つると問はぬことなかりき。

さて官事のいとまあるごとに、かねて公の許しをば得たりければ、ところの大学に入りて政治学を修めむと、名を簿冊に記させつ。

ひと月ふた月と過ぐすほどに、公の打ち合はせも済みて、取り調べもしだいに拂りゆけば、急ぐことをば報告書に作りて送り、さらぬをば写しとどめて、つひには幾巻をかなしけむ。大学のかたにては、幼き心に思ひ計りしがごとく、政治家になるべき特科のあるべうもあらず、これかかれかと心迷ひながらも、二、三の法家の講筵に連なることに思ひ定めて、謝金を納め、行きて聴きつ。

かくて三年ばかりは夢のごとくにたちが、時來れば包みても包みがたきは人の好尚なるらむ、余は父の遺言を守り、母の教へに従ひ、人の神童なりなど褒むるが嬉しさに怠らず学びしときより、官長のよき働き手を得たりと励ますが喜ばしさに

◆一人子の我を力になして世を渡る母の心は慰みけらし 一人っ子の私をよりどころとして暮らす母の心は慰められただらう。

20 覚え 信任。

21 一課の事務 割り当てられた仕事。

22 検束 抑制。自己を規制すること。

23 ヨオロツパの新大都 ベルリンのこと。大道髪のごとき 大道のまっすぐなさまの形容。

25 ウンテル・デン・リンデン ベルリンの中心街。ドイツ語で「菩提樹の下」の意。

26 ウイルヘルム一世 Wilhelm I 一七九七—一八八八年。プロシア王。ドイツを統一し、初代ドイツ皇帝になった。ビスマルクを首相として重用した。

27 土瀝青 アスファルト。

28 ブランデンブルク門 ウンテル・デン・リンデンの西端にある門。

29 凱旋塔 ブランデンブルク門の西北にあった戦勝記念塔。頂に勝利の女神が飾ってあった。

30 目睫の間 非常に近い距離。「目睫」は、目とまつげ。

◆ 応接にいとまなきもうべなり 一つ一つじっくり見ている暇がないのも当然である。

■「我を襲ふ外物」とは何か。

31 鈴索 訪問を知らせる鈴を鳴らすためのひも。



32 東來 東洋の国から来たこと。

33 プロシア プロイセンの英語名。ドイツ帝国建設の中心となった王国。この頃日本では、ドイツ帝国全体をプロシアとも呼んだ。

34 名を簿冊に記させつ 姓名を登録させた。

35 あるべうもあらず あるべくもない。あるはずもない。

36 法家の講筵 法律学者の講義の席。

37 好尚 好み。欲望。

—(学士)(幽静)(楼閣)(遺言)(神童)

たゆみなく勤めしときまで、ただ所動的、器械的の人物になりて自ら悟らざりしが、今二十五歳になりて、既に久しくこの自由なる大学の風に当たりたればにや、心の中なにとなく穏やかならず、奥深く潜みたりしまことの我は、やうやう表に現れて、昨日までの我ならぬ我を攻むるに似たり。余は我が身の今の世に雄飛すべき政治家になるにもよろしからず、またよく法典をそらんじて獄を断ずる法律家になるにもふさはしからざるを悟りたりと思ひぬ。余はひそかに思ふやう、我が母は余を生きたる辞書となさむとし、我が官長は余を生きたる法律となさむとやしけむ。辞書たらむはなほ堪ふべけれど、法律たらむは忍ぶべからず。今までは瑣々たる問題にも極めて丁寧にいらいへしつる余が、この頃より官長に寄する書にはしきりに法制の細目にかかづらふべきにあらぬを論じて、ひとたび法の精神をだに得たらむには、紛々たる万事は破竹のごとくなるべしなどと広言しつ。また大学にては法科の講筵をよそにして、歴史文学に心を寄せ、やうやく蔗を嚼む境に入りぬ。

官長はもと心のままに用ゐるべき器械をこそ作らむとしたりけむ。独立の思想を抱きて、人なみならぬ面もちしたる男をいかでか喜ぶべき。危ふきは余が当時の地位なりけり。されどこれのみにては、なほ我が地位を覆すに足らざりけむを、日頃ベルリンの留学生のうちにて、ある勢力ある一群れと余との間に、面白からぬ関係ありて、かの人々は余を猜疑し、またつひに余を譏誣するに至りぬ。されどこれとてもその故なくてやは。

かの人々は余がともに麦酒の杯をも挙げず、球突きの棒をも取らぬを、かたくななる心と欲を制する力とに帰して、かつは嘲りかつは嫉みたりけむ。されどこは余を知らねばなり。ああ、この故よしは、我が身だに知らざりしを、いかでか人に知るべき。我が心はかの合歡といふ木の葉に似て、物触れば縮みて避けむとす。我が心は処女に似たり。余が幼き頃より長者の教へを守りて、学びの道をたどりしも、仕への道をあゆみしも、みな勇氣ありてよくしたるにあらず、耐忍勉強の力と見えしも、みな自ら欺き、人をさへ欺きつるにて、人のたどらせたる道を、ただ一筋にたどりしのみ。よそに心の乱れざりしは、外物を棄てて顧みぬほどの勇氣ありしにあらず、ただ外物に恐れて自ら我が手足を縛せしのみ。故郷を立ち出づる前にも、我が有為の人物なることを疑はず、また我が心のよく耐へむことを深く信じたりき。ああ、かれも一時。舟の横浜を離るるまでは、あつぱれ豪傑と思ひし身も、せきあへぬ涙に手巾を濡らしつるを我ながら怪しと思ひしが、これぞなかなかに我が本性なりける。この心は生まれながらにやありけむ、また早く父を失ひて母の手に育てられしによりてや生じけむ。

かの人々の嘲るはさることなり。されど嫉むはおろかならずや。この弱くふびんなる心を。

赤く白く面を塗りて、赫然たる色の衣をまとひ、珈琲店に座して客を引く女を見ては、行きてこれに就かむ勇氣なく、高き帽を戴き、眼鏡に鼻を挟ませて、プロシ

38 所動的 受け身の。

39 当たりたればにや 当たったからだらうか。

40 獄を断ずる 裁きを下す。

※ 紛々たる万事は破竹のごとくなるべし 入り乱れた万事は竹を割るようになり片付くだろう。

41 蔗を嚼む境 次第に面白みが分かること。

42 いかでか喜ぶべき どうして喜ぶだろうか。

2 「これ」は何をさすか。

43 譏誣する 事実を曲げて人のことを悪

く言つ。

3 どのような「故」か。

44 故よし 故由。いわれ。理由。

45 合歡 マメ科の落葉高木。その葉は夜になると閉じて垂れる。

46 長者 年長の人。目上の人。

47 有為 能力があること。

※ せきあへぬ涙に……我が本性なりけるとどめきれない涙にハンカチをぬらしたのを我ながらおかしいと思ったが、これこそむしろ私の本性だったのだ。

48 手巾 ハンカチ。

49 赫然たる げげばしい。

50 珈琲店 コーヒーや酒類などを提供する店。【ドイツ語】Café

一（雄飛）（破竹）（耐忍）

アにては貴族めきたる鼻音にて物言ふしエベマンを見ては、行きてこれと遊ばむ勇気なし。これらの勇氣なければ、かの活発なる同郷の人々と交はらむやうもなし。この交際の疎きがために、かの人々はただ余を嘲り、余を嫉むのみならず、また余を猜疑することとなりぬ。これぞ余が冤罪を身に負ひて、暫時の間に無量の艱難を関し尽くすなかだちなりける。

ある日の夕暮れなりしが、余は猷苑を漫步して、ウンテル・デン・リンデンを過ぎ、我がモンビシウ街の僑居に帰らむと、クロステル巷の古寺の前に来ぬ。余はかの灯火の海を渡り来て、この狭く薄暗き巷に入り、楼上の木欄に干したる敷布、襦袢などまだ取り入れぬ人家、頬髭長きユダヤ教徒の翁が戸前にたたくみたる居酒屋、一つの梯はただちに楼に達し、他の梯は穴蔵住まひの鍛冶が家に通じたる貸家などに向かひて、凹字の形に引き込みて建てられたる、この三百年前の遺跡を望むことに、心の恍惚となりてしばしたたずみしこと幾度なるを知らず。

今この所を過ぎむとするとき、鎖したる寺門の扉に倚りて、声のみつつ泣くひとりの少女あるを見たり。年は十六、七なるべし。被りし巾を洩れたる髪の色は、薄きこがね色にて、着たる衣は垢つき汚れたりとも見えず。我が足音に驚かされてかへりみたる面、余に詩人の筆なければこれを写すべくもあらず。この青く清らにて物問ひたげに愁いを含める目の、半ば露を宿せる長き睫毛に覆はれたるは、何故に一顧したるのみにて、用心深き我が心の底までは徹したるか。

彼ははからぬ深き嘆きに遭ひて、前後を顧みるいとまなく、ここに立ちて泣くにや。我が臆病なる心は憐憫の情に打ち勝たれて、余は覚えずそばに倚り、「何故に泣きたまふか。ところで係累なき外人は、かへりて力を貸しやすきこともあらむ。」と言ひ掛けたるが、我ながら我が大胆なるにあきれたり。

彼は驚きて我が黄なる面をうち守りしが、我が真率なる心や色に現れたりけむ。「君は善き人なりと見ゆ。彼のごとく酷くはあらず。また我が母のごとく。」しばし涸れたる涙の泉はまたあふれて愛らしき頬を流れ落つ。

「我を救ひたまへ、君。我が恥なき人とならむを。母は我が彼の言葉に従はねばとて、我を打ちき。父は死にたり。明日は葬らではかなはぬに、家に一銭の貯へだになし。」

あとは歎歎の声のみ。我が眼はこのうつむきたる少女の震ふ項にのみ注がれたり。「君が家に送る行かむに、まづ心を鎮めたまへ。声をな人に聞かせたまひそ。ここは往来なるに。」彼は物語するうちに、覚えず我が肩に倚りしが、このときふと頭をもたげ、また初めて我を見たるがごとく、恥ぢて我が側を飛びのきつ。

人の見るが厭はしさに、早足に行く少女の跡につきて、寺の筋向かひなる大戸を入れば、欠け損じたる石の梯あり。これを上りて、四階目に腰を折りてくぐるべきほどの戸あり。少女は錆びたる針金の先をねち曲げたるに、手を掛けて強く引きしに、中にはしはがれたる老嫗の声して、「誰ぞ。」と問ふ。エリス帰れぬと答ふる間

51 エベマン 道楽者。遊び人。「ドイツ語 Lebemann」

52 艱難 苦しみ。困難。

53 猷苑 ティーアガルテン（ドイツ語 Tiergarten）の訳。ブランデンブルク門の西にある大森林公園。

54 僑居 仮住まい。下宿。

55 クロステル巷 クロステル街。木欄 手すり。

57 ユダヤ教 ユダヤ人の宗教。絶対唯一神ヤハウェ（エホバ）を信奉し、モーゼの律法を奉ずる。聖典は「旧約聖書」。

58 彼 この少女をさす。「彼」は、明治時代まで男女の区別なく用いられた。

59 ところに係累なき この地につながるのある人を持たない。

60 色 表情。

4 「彼」とは誰のことか。

61 歎歎 すすり泣き。

※ 声をな人に聞かせたまひそ 泣き声を人に聞かせてはなりません。

もなく、戸をあららかに引き開けしは、半ば白みたる髪、悪しき相にはあらねど、貧苦の跡を額に印せし面の老媪にて、古き獸綿の衣を着、汚れたる上靴を履きたり。エリスの余に会釈して入るを、彼は待ちかねしごとく、戸を激しくたて切りつ。

余はしばし茫然として立ちたりしが、ふと油灯の光に透かして戸を見れば、エルンスト・ワイゲルトと漆もて書き、下に仕立物師と注したり。これすぎぬといふ少女が父の名なるべし。内には言ひ争ふごとき声聞こえしが、また静かになりて戸は再び開きぬ。先の老媪は慇懃におのが無礼の振る舞ひせしを詫びて、余を迎へ入れつ。戸の内は厨にて、右手の低き窓に、真白に洗ひたる麻布を掛けたり。左手には粗末に積み上げたる煉瓦のかまどあり。正面の一室の戸は半ば開きたるが、内には白布を覆へる臥床あり。伏したるはなき人なるべし。かまどの側なる戸を開きて余を導きつ。この所はいはゆるマンサルドの街に面したる一間なれば、天井もなし。隅の屋根裏より窓に向かひて斜めに下される梁を、紙にて張りたる下の、立たば頭のつかふべき所に臥床あり。中央なる机には美しき氈を掛けて、上には書物一、二巻と写真帳とを並べ、陶瓶にはここに似合はしからぬ価高き花束を生けたり。それが傍らに少女は羞を帯びて立てり。

彼は優れて美なり。乳のごとき色の顔は灯火に映じて微紅を潮したり。手足のか細くたをやかなるは、貧家の女に似ず。老媪の室を出でし後にて、少女は少し訛りたる言葉にて言ふ。「許したまへ。君をここまで導きし心なさを。君は善き人な

るべし。我をばよも憎みたまはじ。明日に迫るは父の葬り、たのみに思ひしシヤウムベルヒ、君は彼を知らでやおはさむ。彼はヴイクトリア座の座頭なり。彼が抱へとなりしより、早二年なれば、事なく我らを助けむと思ひしに、人の憂ひにつけ込みて、身勝手なる言ひ掛けせむとは。我を救ひたまへ、君。金をば薄き給金をさきて返しませむ。よしや我が身は食はずとも。それもならずば母の言葉に。」彼は涙ぐみて身を震はせたり。その見上げたる目には、人に否とは言はせぬ媚態あり。この目の働きは知りてするにや、また自らは知らぬにや。

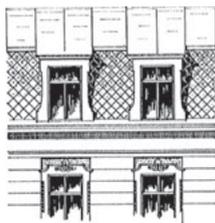
我が隠しには二、三マルクの銀貨あれど、それにて足るべくもあらねば、余は時計をばづして机の上に置きぬ。「これにて一時の急をしのぎたまへ。質屋の使ひのモンビシユウ街三番地にて太田と訪ね来む折には価を取らずべきに。」

少女は驚き感ぜしさま見えて、余が辞別のために出だしたる手を唇に当てたるが、はらはらと落つる熱き涙を我が手の背に注ぎつ。

ああ、なんらの悪因ぞ。この恩を謝せむとて、自ら我が僑居に來し少女は、シヨオペンハウエルを右にし、シルレルを左にして、終日兀坐する我が読書の窓下に、一輪の名花を咲かせてけり。このときを初めとして、余と少女との交はりやうやくしげくなりもて行きて、同郷人にさへ知られぬれば、彼らは速了にも、余をもて色を舞姫の群れに漁するものとしたり。我ら二人の間にはまだ痴騷なる歡樂のみ存したりしを。

62 あららかに 荒々しく。  
63 獸綿 ラシヤ。羊毛を原料とした厚地の毛織物。

64 厨 台所。  
65 臥床 ベッド。  
66 マンサルド 屋根裏部屋。「フランス語」mansarde



67 氈 毛織りのテール・クロス。  
68 陶瓶 陶製の花瓶。  
69 潮したり 帯びている。  
\* よも憎みたまはじ まさかお憎みにならないでしょう。  
70 ヴイクトリア座 ウンテル・デン・リデンの北東にあった劇場。  
71 抱へ 雇われ人。

72 言ひ掛け 言いがかり。

\* 金をば薄き給金をさきて返しませむ お金は少ない給料を割いてお返しいたしましょう。

73 よしや たとえ。

74 マルク かつてドイツで使用されていた貨幣の単位。「ドイツ語」Mark

5 「悪因」という言い方をしたのはなぜか。

75 シヨオペンハウエル Arthur Schopenhauer 一七八八—一八六〇年。ドイツの哲学者。著書に『意志と表象としての世界』などがある。シヨオペンハウエル。

76 シルレル Friedrich von Schiller 一七五九—一八〇五年。ドイツの詩人・劇作家。戯曲に『ヴァイルヘルム・テル』などがある。シラー。

77 兀坐 じっと座っていること。

78 速了にも 早合点して。

79 痴騷 子供っぽいさま。  
—(貧苦) (仕立物) (質屋) (悪因) (歡樂)

その名を指さむは憚りあれど、同郷人の中に事を好む人ありて、余がしばしば芝居に出入りして、女優と交はるといふことを、官長のもとに報じつ。さらぬだに余がすこぶる学問の岐路に走るを知りて憎み思ひし官長は、つひに旨を公使館に伝へて、我が官を免じ、我が職を解いたり。公使がこの命を伝ふるとき余に言ひしは、御身もし即時に郷に帰らば、路用を給すべけれど、もしなほここに在らむには、公の助けをば仰ぐべからずとのことなりき。余は一週日の猶予を請ひて、とやかうと思ひ煩ふうち、我が生涯にて最も悲痛を覚えさせたる二通の書状に接しぬ。この二通はほとんど同時に出だしものなれど、一は母の自筆、一は親族なる某が、母の死を、我がまたなく慕ふ母の死を報じたる書なりき。余は母の書中の言をここに反覆するに堪へず、涙の迫り来て筆の運びを妨ぐればなり。

余とエリスとの交際は、このときまではよそ目に見るより清白なりき。彼は父の貧しきがために、充分なる教育を受けず、十五のとき舞の師のつりに応じて、この恥づかしき業を教へられ、クルズス果てて後、ヴィクトリア座に出でて、今は場中第二の地位を占めたり。されど詩人ハックレンデルが当世の奴隷と言ひしごとく、はかなきは舞姫の身の上なり。薄き給金にて繋かれ、昼の温習、夜の舞台と厳しく使はれ、芝居の化粧部屋に入りてこそ紅粉をも粧ひ、美しき衣をもまとへ、場外にては独り身の衣食も足らずがちなれば、親はらからを養ふものはその辛苦いかにぞや。されば彼らの仲間にて、賤しき限りなる業に墮ちぬは稀なりとぞいふなる。エ

リスがこれを逃れしは、おとなしき性質と、剛気ある父の守護とによりてなり。彼は幼きときより物読むことをばさすがに好みしかど、手に入るは卑しきゴルポルタアジユと唱ふる貸本屋の小説のみなりしを、余と相知る頃より、余が貸しつる書を読みならひて、やうやく趣味をも知り、言葉の訛りをも正し、いくほどもなく余に寄する文にも誤字少なくなりぬ。かかれば余ら二人の間にはまづ師弟の交はりを生じたるなりき。我が不時の免官を聞きしときに、彼は色を失ひつ。余は彼が身の事に関はりしを包み隠しぬれど、彼は余に向かひて母にはこれを秘めたまへと言ひぬ。こは母の余が学資を失ひしを知りて余を疎んぜむを恐れてなり。

ああ、詳しくここに写さむも要なけれど、余が彼を愛づる心にはかに強くなりて、つひに離れ難き仲となりしはこの折なりき。我が一身の大事は前に横たはりて、まことに危急存亡の秋なるに、この行ひありしをあやしみ、またそしる人もあるべけれど、余がエリスを愛する情は、初めて相見しときよりあさくはあらぬに、今我が数奇を哀れみ、また別離を悲しみて伏し沈みたる面に、鬢の毛の解けてかかりたる、その美しき、いぢらしき姿は、余が悲痛感慨の刺激によりて常ならずなりたる脳髓を射て、恍惚の間にここに及びしをいかにせむ。

公使に約せし日も近づき、我が命は迫りぬ。このままにて郷に帰らば、学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ。さればとてとどまらむには、学資を得べき手だてなし。

80 さらぬだに そうですねとさえ。

81 路用 旅費。

82 とやかうと あれこれと。

83 クルズス 講習。課程。「ドイツ語」

Kursus

84 ハックレンデル Friedrich Wilhelm

von Haeklander 一八一六—一七七年。

ドイツの作家。著書『ヨーロッパの奴隷生活』に、踊り子を奴隷の例として挙げてゐる。ハックレンダー。

85 温習 おさらい。

86 コルポルタアジユ 行商。「フランス語」colportage

6 「秘めたまへ」と言ったのはなぜか。

87 数奇 不運。不幸せ。

※ 恍惚の間にここに及びしをいかにせむ  
心奪われている間にこうなってしまうのか。

（岐路）（猶予）（免官）（脳髓）

\* 事を好む

\* 危急存亡の秋

\* 浮かぶ瀬

このとき余を助けしは今我が同行の一人なる相沢謙吉なり。彼は東京に在りて、既に天方伯の秘書官たりしが、余が免官の官報に出でしを見て、某新聞紙の編集長に説きて、余を社の通信員となし、ベルリンにとどまりて政治学芸のころなどを報道せしむることなしつ。

社の報酬は言ふに足らぬほどなれど、住みかをもうつし、午餐に行く食店をもかへたらむには、微かなる暮らしは立つべし。とかう思案するほどに、心の誠を顕して、助けの綱を我に投げ掛けしはエリスなりき。彼はいかに母を説き動かしかむ、余は彼ら親子の家に寄寓することとなり、エリスと余とはいつよりとはなしに、有るか無きかの収入を合はせて、憂きが中にも楽しき月日を送りぬ。

朝の珈琲果つれば、彼は温習に行き、さらぬ日には家にとどまりて、余はキヨオニヒ街の間口狭く奥行きのみいと長き休息所に赴き、あらゆる新聞を読み、鉛筆取り出でてかれこれと材料を集む。この切り開きたる引き窓より光を取れる室にて、定まりたる業なき若人、多くもあらぬ金を人に貸して己は遊び暮らす老人、取引所の業の隙を盗みて足を休むる商人などと臂を並べ、冷ややかなる石卓の上にて、忙はしげに筆を走らせ、小女が持て来る一盞の珈琲の冷むるをも顧みず、空きたる新聞の細長き板ぎれに挟みたるを、幾種となく掛け連ねたるかたへの壁に、幾度となく往来する日本人を、知らぬ人は何とか見けむ。また一時近くなるほどに、温習に行きたる日には帰り路によぎりて、余とともに店を立ち出づるこの常ならず軽き、

95 掌上の舞をもし得つべき少女を、怪しみ見送る人もありしなるべし。

我が学問は荒みぬ。屋根裏の一灯微かに燃えて、エリスが劇場より帰りて、椅子に寄りて縫ひ物などする側の机にて、余は新聞の原稿を書けり。昔の法令条目の枯れ葉を紙上にかき寄せしとは殊にて、今は活発々たる政界の運動、文学美術に係る新現象の批評など、かれこれと結び合はせて、力の及ばむ限り、ビヨルネよりはむしろハイネを学びて思ひを構へ、様々の文を作りし中にも、引き続きてウイルヘルム一世とフレデリック三世との崩殂ありて、新帝の即位、ビスマルク侯の進退いかななどのことにつきては、ことさらに詳かなる報告をなしき。さればこの頃よりは思ひしよりも忙はしくして、多くもあらぬ蔵書を繙き、旧業を尋ぬることも難く、大学の籍はまだ削られねど、謝金を納むることの難ければ、ただ一つにしたる講筵だに行きて聴くことは稀なりき。

我が学問は荒みぬ。されど余は別に一種の見識を長じき。そをいかにと言ふに、およそ民間学の流布したることは、欧州諸国の間にてドイツにしくはなからむ。幾百種の新聞雑誌に散見する議論にはすこぶる高尚なるも多きを、余は通信員となりし日より、かつて大学にしがく通ひし折、養ひ得たる一隻の眼孔もて、読みてはまた読み、写してはまた写すほどに、今まで一筋の道のみ走りし知識は、おのづから総括的になりて、同郷の留学生などの大かたは、夢にも知らぬ境地に至りぬ。彼らの仲間にはドイツ新聞の社説をだによくはえ読まぬがあるに。

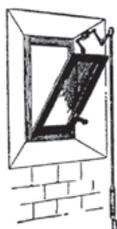
88 官報 日刊の政府機関紙。詔勅・法令・辞令など各省の通達事項を掲載する。

89 とかう とかく。あれこれと。

90 キヨオニヒ街 ケーニヒ街。

91 休息所 「珈琲店」と同じ。

92 引き窓 綱を引いて開閉する天窓。



93 一盞 一杯。

94 よぎりて 立ち寄って。

95 掌上の舞 身振りのごく軽い舞。

96 殊にて 異なつて。

97 ビヨルネ Ludwig Börne 一七八六—一八三七年。ドイツの評論家。著書に『パリだより』などがある。ベルネ。

98 ハイネ Heinrich Heine 一七九七—一八五六年。ドイツの詩人。詩集に『歌の本』などがある。

99 フレデリック三世 Friedrich III 一八三—一八八八年。一八八八年三月、父ウイルヘルム一世の死によって跡を継いだ。六月に死去。フリードリッヒ三世。

100 崩殂 崩御。

101 新帝 フレデリック三世の子、ウイルヘルム二世（一八五九—一九四一年）。

102 ビスマルク Otto Eduard Leopold von Bismarck 一八一五—一九八八年。ドイツの政治家。ウイルヘルム二世と政策上の意見が対立し、一八九〇年三月に首相を辞職した。

103 一隻の眼孔 ものを見通すすぐれた見識のこと。

※ 社説をだによくはえ読まぬがあるに社説さえ満足に読めない者がいるのに。

一（旧業）（散見）（高尚）（総括的）

明治二十一年の冬は来にけり。表街の人道にてこそ砂をも蒔け、鍬をもふるへ、クロステル街のあたりは凸凹坎坳の所は見ゆめれど、表のみは一面に凍りて、朝に戸を開けば飢え凍えし雀の落ちて死にたるも哀れなり。室を温め、かまどに火を焚きつけても、壁の石を通し、衣の綿を穿つ北ヨオロッパの寒さは、なかなか堪へ難かり。エリスは二、三日前の夜、舞台にて卒倒しつとて、人に扶けられて帰り来しが、それより心地悪しとて休み、物食ふごとに吐くを、悪阻といふものならむと初めて心づきは母なりき。ああ、さらぬだにおぼつかなきは我が身の行く末なるに、もしまことなりせばいかにせまし。

今朝は日曜なれば家に在れど、心は楽しからず。エリスは床に臥すほどにはあらねど、小さき鉄炉のほとりに椅子さし寄せて言葉少なし。このとき戸口に人の声して、ほどなく庖厨に在りしエリスが母は、郵便の書状を持て来て余に渡しつ。見れば見覚えある相沢が手なるに、郵便切手はプロシアのものにて、消印にはベルリンとあり。いぶかりつつも開きて読めば、とみのことにてあらかじめ知らするに由なかりしが、昨夜ここに着せられし天方大臣につきて我も来たり。伯の汝を見まほしとのたまふに疾く来よ。汝が名誉を回復するもこのときにあるべきぞ。心のみ急がれて用事をのみ言ひやるとなり。読み終はりて茫然たる面もちを見て、エリス言ふ。「故郷よりの文なりや。悪しき便りにてはよも。」彼は例の新聞社の報酬に関する書状と思ひしならむ。「否、心にな掛けそ。御身も名を知る相沢が、大臣とともにこ

こに来て我を呼ぶなり。急ぐと言へば今よりこそ。」  
かはゆき独り子を出だしやる母もかくは心を用ゐじ。大臣にまみえもやせむと思へばならむ、エリスは病をつとめて起ち、上襦袴も極めて白きを選び、丁寧にしまひ置きしがエロツクといふ二列ぼたんの服を出だして着せ、襟飾りさへ余がために手づから結びつ。  
「これにて見苦しとは誰もえ言はじ。我が鏡に向きて見たまへ。何故にかく不興なる面もちを見せたまふか。我ももろともに行かまほしきを。」少し容をあらためて。「否、かく衣を改めたまふを見れば、なにとなく我が豊太郎の君とは見えす。」また少し考へて。「よしや富貴になりたまふ日はありとも、我をば見捨てたまはじ。我が病は母ののたまふごとくならずとも。」

「何、富貴。」余は微笑しつ。「政治社会などに出でむの望みは絶ちしより幾年をか経ぬるを。大臣は見たくもなし。ただ年久しく別れたりし友にこそ逢ひには行け。」エリスが母の呼びし一等ドロシユケは、輪下にきしる雪道を窓の下まで来ぬ。余は手袋をはめ、少し汚れたる外套を背に被ひて手をば通さず帽を取りてエリスに接吻して襦を下りつ。彼は凍れる窓を開け、乱れし髪を朔風に吹かせて余が乗りし車を見送りぬ。

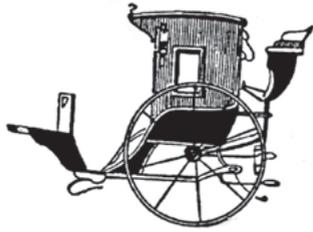
余が車を下りしはカイゼルホーフの入り口なり。門者に秘書官相沢が室の番号を問ひて、久しく踏み慣れぬ大理石の階を上り、中央の柱にブリユツシユを被へるゾ

104 坎坳 平らでないこと。また、行き悩むこと。  
105 見ゆめれど 見えるようだが。  
106 なかなか なじみのことでは。  
※もしまことなりせばいかにせましもし本当であったならどうしたらよいだろう。



107 鉄炉 鉄製のストープ。  
108 庖厨 台所。  
109 とみのこと 急なこと。  
110 見まほし 会いたい。  
※悪しき便りにてはよも 悪い知らせではまさかないでしょうね。  
111 まみえもやせむ 面会もするだろうか。  
112 上襦袴 ワイシャツ。  
113 ゲエロツク フロックコート。男性用の屋間の礼服。「ドイツ語」Gehrock  
114 襟飾り ネクタイ。

8 「何、富貴」とはどのような気持ちで言ったものか。



115 ドロシユケ 一頭立ての辻馬車。「ドイツ語」Droschke  
116 朔風 北風。  
117 カイゼルホーフ ホテルの名。ドイツ語で「皇帝ホテル」の意。「ドイツ語」Kaiser Hof  
118 プリユツシユ 毛織りビロード。「フランス語」peluche  
119 ソファ ソファ。長椅子。「ドイツ語」Sofa  
一卒倒へ不興へ富貴へ

フアを据えつけ、正面には鏡を立てたる前房<sup>120</sup>に入りぬ。外套<sup>くわいとう</sup>をばここにて脱ぎ、廊<sup>わだの</sup>をつたひて室<sup>むろ</sup>の前まで行きしが、余は少し脚躰<sup>121</sup>したり。同じく大学に在りし日に、余が品行<sup>122</sup>の方正なるを激賞したる相沢が、今日はいかなる面もちして出で迎ふらむ。室に入りて相對して見れば、形こそ旧<sup>もと</sup>に比ぶれば肥えてたくましくなりたれ、依然たる快活の氣象、我が失行をもさまで意に介せざりきと見ゆ。別後の情を細叙するにもいとまならず、引かれて大臣に謁し、委託せられしはドイツ語にて記せる文書<sup>もんじょ</sup>の急を要するを翻訳せよとのことなり。余が文書を受領して大臣の室を出でしとき、相沢は後より来て余と午餐<sup>ひるむす</sup>を共にせむと言ひぬ。

120 前房 ロビー。  
121 脚躰 ためらうこと。  
122 品行 生活の道。生きてきた道。  
123 軻軻 不遇。

食卓にては彼多く問ひて、我多く答へき。彼が生路<sup>122</sup>はおほむね平滑なりしに、轉軻<sup>かやく</sup>数奇<sup>かずき</sup>なるは我が身の上なりければなり。

余が胸臆<sup>123</sup>を開いて物語りし不幸なる聞歴を聞きて、彼はしばしば驚きしが、なかなか余を責めむとはせず、かへりて他の凡庸なる諸生輩を罵りき。されど物語の終はりしとき、彼は色を正していさむるやう、この一段のことはもと生まれながらなる弱き心より出でしなれば、今さらに言はむも甲斐<sup>かひ</sup>なし。とはいへ、学識あり、才能あるものが、いつまでか一少女<sup>をとめ</sup>の情にかかづらひて、目的なき生活<sup>なげはな</sup>をなすべき。今は天方伯もただドイツ語を利用せむの心のみなり。己もまた伯が当時の免官の理由<sup>124</sup>を知れるが故に、強ひてその成心を動かさむとはせず、伯が心中にて曲庇<sup>125</sup>者<sup>もの</sup>なりなど思はれむは、朋友<sup>ともだち</sup>に利なく、己に損あればなり。人を薦むるはまづその能を

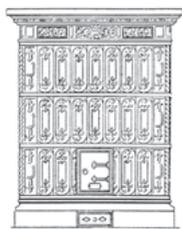
124 成心 心にある考え。思い込み。  
125 曲庇者 道理を曲げて人をかばう者。

示すにしかず。これを示して伯の信用を求めよ。またかの少女との関係は、よしや彼に誠ありとも、よしや情交は深くなりぬとも、人材を知りての恋にあらず、慣習といふ一種の惰性より生じたる交はりなり。意を決して断てと。これその言<sup>こと</sup>のおほむねなりき。

大洋に舵<sup>かち</sup>を失ひし舟人が、遙<sup>とほ</sup>かなる山を望むごときは、相沢が余に示したる前途の方針なり。されどこの山はなほ重霧の間に在りて、いつ行きつかむも、否、はたして行きつきぬとも、我が中心<sup>126</sup>に満足を与へむも定かならず。貧しきが中にも樂しきは今の生活、棄<sup>す</sup>て難きはエリスが愛。我が弱き心には思ひ定めむ由なかりしが、しばらく友の言に従ひて、この情縁を断たむと約しき。余は守るところを失はじと思ひて、己に敵するものには抗<sup>127</sup>抵<sup>127</sup>すれども、友に對して否とはえ答へぬが常なり。別れて出づれば風面<sup>おもて</sup>を打てり。二重<sup>ふたへ</sup>の玻璃窓<sup>ガラス</sup>を厳しく鎖<sup>かぎ</sup>して、大いなる陶炉<sup>128</sup>に火を焚<sup>た</sup>きたるホテルの食堂を出でしなれば、薄き外套<sup>はく</sup>を透<sup>ほ</sup>る午後四時の寒さはことさらに堪<sup>た</sup>へ難<sup>が</sup>く、膚粟<sup>はだぐ</sup>立つとともに、余は心の中に一種の寒さを覚えき。

9 「遙かなる山」とは具体的に何をさすか。  
126 中心 心の中。胸中。  
※ 我が弱き心には思ひ定めむ由なかりしが、私の弱い心には決心するすべもなかつたが。

127 抗抵 抵抗。  
128 陶炉 陶製の暖炉。



翻訳は一夜になし果てつ。カイゼルホーフへ通ふことはこれよりやうやくしげくなりもて行くほどに、初めは伯の言葉も用事のみなりしが、後には近頃故郷にてありしことなどを挙げて余が意見を問ひ、折に触れては道中にて人々の失錯<sup>129</sup>ありしことどもを告げてうち笑ひたまひき。

129 明旦 明日の朝。

一月ばかり過ぎて、ある日伯は突然我に向かひて、「余は明旦<sup>129</sup>、ロシアに向かひ

〔品行〕〔方正〕〔激賞〕〔細叙〕〔胸臆〕  
〔聞歴〕〔情縁〕〔失錯〕

て出発すべし。従ひて来べきか。」と問ふ。余は数日間、かの公務にいとまなき相  
沢を見ざりしかば、この問ひは不意に余を驚かしつ。「いかで命に従はざらむ。」余  
は我が恥を表さむ。この答へはいち早く決断して言ひしにあらざ。余は己が信じて  
頼む心を生じたる人に、卒然ものを問はれたるときは、咄嗟の間、その答への範圍  
をよくも量らず、ただちにうべなふことあり。さてうべなひし上にて、そのなし難  
きに心づきても、強ひて当時の心虚なりしを覆ひ隠し、耐忍してこれを実行するこ  
としばしばなり。

この日は翻訳の代に、旅費さへ添へて賜りしを持って歸りて、翻訳の代をばエリス  
に預けつ。これにてロシアより歸り来むまでの費えをば支へつべし。彼は医者に見  
せしに常ならぬ身なりといふ。貧血の性なりし故、幾月か心づかでありけむ。座頭  
よりは休むことあまりに久しければ籍を除きぬと言ひおこせつ。まだ一月ばかり  
なるに、かく厳しきは故あればなるべし。旅立ちのことにはいたく心を悩ますとも  
見えず。偽りなき我が心を厚く信じたれば。

鐵路にては遠くもあらぬ旅なれば、用意とてもなし。身に合はせて借りたる黒き  
礼服、新たに買ひ求めたるゴタ板の魯廷の貴族譜、二、三種の辞書などを、小カバ  
ンに入れたるのみ。さすがに心細きことのみ多きこのほどなれば、出で行く跡に残  
らむも物憂かるべく、また停車場にて涙こぼしなどしたらむにはうしろめたかるべ  
ければとて、翌朝早くエリスをば母につけて知る人がり出だしやりつ。余は旅装整

へて戸を鎖し、鍵をば入り口に住む靴屋の主人に預けて出でぬ。

魯国行きにつきては、何事をか叙すべき。我が舌人たる任務はたちまちに余を拉  
し去りて、青雲の上に落したり。余が大臣の一行に従ひて、ペエテルブルクに在  
りし間に余を圍繞せしは、パリ絶頂の驕奢を、氷雪のうちに移したる王城の粧飾、  
ことさらに黄蠟の燭を幾つともなく点したるに、幾星の勳章、幾枝のエポレットが  
映射する光、彫鏤の巧みを尽くしたるカミンの火に寒さを忘れて使ふ宮女の扇のひ  
らめきなどにて、この間フランス語を最も円滑に使ふものは我なるが故に、寶主の  
間に周旋して事を弁ずるものもまた多くは余なりき。

この間余はエリスを忘れざりき、否、彼は日ごとに書を寄せしかばえ忘れざりき。  
余が立ちし日には、いつになく独りにて灯火に向かはむことの心憂さに、知る人の  
もとにて夜に入るまで物語りし、疲るるを待ちて家に歸り、ただちに寝ねつ。次の  
朝目覚めしときは、なほ独り跡に残りしことを夢にはあらずやと思ひぬ。起き出  
でしときの心細さ、かかる思ひをば、生計に苦しみて、今日の日の食なかりし折に  
もせざりき。これ彼が第一の書のあらましなり。

またほど経ての書はすこぶる思ひ迫りて書きたることくなりき。文をば否といふ  
字にて起こしたり。否、君を思ふ心の深き底をば今ぞ知りぬる。君はふるさとに頼  
もしき族なしとのたまへば、この地によき世渡りの生計あらば、とどまりたまはぬ  
ことやはある。また我が愛もて繋ぎとどめではやまじ。それもかなはで東に歸りた

130 支へつべし 支えることができるだろ  
う。

131 ゴタ板 ドイツ中部の小都市ゴタで刊  
行された書物。ヨーロッパ各地の貴族  
の系図や宮廷行事などを記したシリ  
ー  
ズがあった。

132 魯廷 ロシアの宮廷。  
※ うしろめたかるべければとて（私

も）気がかりであろうというので。

133 知る人がり 知人のもとへ。

134 舌人 通訳。

135 青雲 高位高官。ロシアの宮廷をさす。  
136 ペエテルブルク 帝政ロシアの首府。  
現在のサンクトペテルブルグ。

137 圍繞 取り囲むこと。

138 黄蠟の燭 ミツパチの巢から作る黄色  
いろろそく。蜜蠟。

139 エポレット 肩章。「フランス語」  
epaulette



140 彫鏤 彫刻して飾りをほどこすこと。  
141 カミン 壁に取りつけた暖炉。「ドイ  
ツ語」Kamin

142 寶主 客と主人。

※ とどまりたまはぬことやはある とど  
まってくださらないことがあるでしょ  
うか、いや、ありません。

—（鐵路）（旅装）（映射）（周旋）

まはむとならば、親ともに行かむはやすけれど、かほどに多き路用をいづくよりか得む。いかなる業をなしてもこの地にとどまりて、君が世に出でたまはむ日をこそ待ためと常には思ひしが、しばしの旅とて立ち出でたまひしよりこの二十日ばかり、別離の思ひは日にけに茂りゆくのみ。袂を分かつはただ一瞬の苦難なりと思ひしは迷ひなりけり。我が身の常ならぬがやうやくにしろくなれる、それさへあるに、よしやいかなることありとも、我をばゆめな棄てたまひそ。母とはいたく争ひぬ。されど我が身の過ぎし頃には似て思ひ定めたるを見て心折れぬ。我が東に行かむ日には、ステツチン<sup>143</sup>わたりの農家に、遠き縁者あるに、身を寄せむとぞ言ふなる。書きおくりたまひしごとく、大臣の君に重く用ゐられたまはば、我が路用の金はともかくもなりなむ。今はひたすら君がベルリンに帰りたまはむ日を待つのみ。

10

ああ、余はこの書を見て初めて我が地位を明視し得たり。恥づかしきは我が鈍き心なり。余は我が身一つの進退につきても、また我が身に関はらぬ他人のことにつきても、決断ありと自ら心に誇りしが、この決断は順境にのみありて、逆境にはあらず。我と人との関係を照らさむとするときは、頼みし胸中の鏡は曇りたり。

大臣は既に我に厚し。されど我が近眼はただ己が尽くしたる職分のみ見き。余はこれに未来の望みを繋ぐことには、神も知るらむ、絶えて思ひ至らざりき。されど今ここに心づきて、我が心はなほ冷然たりしか。先に友の勧めしときは、大臣の信用は屋上の鳥のごとくなりしが、今はややこれを得たるかと思はるるに、相沢が

145 屋上の鳥 取ろうとしても手の届かな

この頃の言葉の端に、本国に帰りて後もともかくてあらば云々と云ひしは、大臣のかくのたまひしを、友ながらも公事なれば明らかには告げざりしか。今さら思へば、余が軽率にも彼に向かひてエリスとの関係を絶たむと言ひしを、早く大臣に告げやしけむ。

いもの。捉えがたいものたえ。

ああ、ドイツに來し初めに、自ら我が本領を悟りきと思ひて、また器械的人物とはならじと誓ひしが、こは足を縛して放たれし鳥のしばし羽を動かして自由を得たりと誇りしにはあらずや。足の糸は解くに由なし。先にこれを操りしは、我が

5

某省の官長にて、今はこの糸、あなあはれ、天方伯の手中に在り。余が大臣の一行とともにベルリンに帰りしは、あたかもこれ新年の旦なりき。停車場に別れを告げて、我が家をさして車を駆りつ。ここにては今も除夜に眠らず、元旦に眠るが習ひなれば、万戸寂然たり。寒さは強く、路上の雪は稜角ある氷片となりて、晴れたる日に映じ、きらきらと輝けり。車はクロステル街に曲がりて、家の入り口に駐まりぬ。このとき窓を開く音せしが、車よりは見えぬ。馭丁にカバン持たせて梯子を上らむとするほどに、エリスの梯を駆け下るに逢ひぬ。彼が一声叫びて我が項を抱きしを見て馭丁はあきれたる面もちにて、何やらむ髭の内にて言ひしが聞こえず。

10

「よぐぞ帰り来たたまひし。帰り来たまはずば我が命は絶えなむを。」

15

我が心はこのときまでも定まらず、故郷を思ふ念と栄達を求むる心とは、時として愛情を任せむとせしが、ただこの一刹那、低徊踟蹰の思ひは去りて、余は彼を抱

※ 我をばゆめな棄てたまひそ 私をけつして捨てないでください。

143 ステツチン ベルリンの北東約一三〇キロメートルにある都市。現在はポーランド領。シチエチン。

④ 「鈍き心」とはどのようなものか。

144 近眼 将来が見通せないこと。近視眼。

147 稜角ある かどのがった。

148 馭丁 御者。

149 低徊踟蹰 思いに沈みながら行きつ戻りつすること。考えあぐむこと。

〔明視〕〔順境〕〔冷然〕〔本領〕〔除夜〕〔寂然〕〔栄達〕  
\* 袂を分かつ

き、彼の頭は我が肩に倚りて、彼が喜びの涙ははらはらと肩の上に落ちぬ。「幾階か持ちて行くべき。」と鑼のごとく叫びし馭丁は、いち早く上りて梯の上に立てり。

戸の外に出で迎へしエリスが母に、馭丁をねぎらひたまへと銀貨を渡して、余は手を取りて引くエリスに伴はれ、急ぎて室に入りぬ。一瞥して余は驚きぬ、机の上には白き木綿、白きレエスなどをうづたかく積み上げたれば。

エリスはうち笑みつつこれを指して、「何とか見たまふ、この心がまへを。」と言ひつつ一つの木綿ぎれを取り上ぐるを見れば襦袢なりき。「我が心の樂しさを思ひたまへ。産まれむ子は君に似て黒き瞳をや持ちたらむ。この瞳。ああ、夢にのみ見しは君が黒き瞳なり。産まれたらむ日には君が正しき心にて、よもあだし名をば名のらせたまはじ。」彼は頭を垂れたり。「幼しと笑ひたまはんが、寺に入らむ日はいかにうれしからまし。」見上げたる目には涙満ちたり。

二、三日の間は大臣をも、旅の疲れやおはさむとてあへて訪はず、家のみ籠もりをりしが、ある日の夕暮れ使ひして招かれぬ。行きてみれば待遇殊にめでたく、ロシア行きの労を問ひ慰めて後、我とともに東に帰る心なきか、君が学問こそ我が測り知るところならね、語学のみにて世の用には足りなむ、滞留のあまりに久しければ、様々の係累もやあらむと、相沢に問ひしに、さることなしと聞きて落ちるたりとのたまふ。その気色否むべくもあらず。あなやと思ひしが、さすがに相沢の言

を偽りなりとも言ひ難きに、もしこの手にしもすがらずば、本国をも失ひ、名譽を引きかへさむ道をも絶ち、身はこの広漠たる欧州大都の人の海に葬られむかと思ふ念、心頭を衝いて起これり。ああ、なんらの特操なき心ぞ、「承りはべり。」と答へたるは。



ウンテル・デン・リンデン (1909年)

黒がねの額はありとも、帰りにエリスに何とか言はむ。ホテルを出でしときの我が心の錯乱は、たとへむに物なかりき。余は道の東西をも分かず、思ひに沈みて行くほどに、行き合ふ馬車の馭丁に幾度か吐せられ、驚きて飛びのきつ。しばらくしてふとあたりを見れば、獣苑の傍らに出でたり。倒るるごとくに道の辺の腰掛けに倚りて、焼くがごとく熱し、槌にて打たるごとく響く頭を榻背に持たせ、死したるごときさまにて幾時をか過ごしけむ。激しき寒さ骨に徹すと覚えて醒めしときは、夜に入りて雪はしげく降り、帽のひさし、外套の肩は一寸ばかりも積もりたりき。

5 が心の錯乱は、たとへむに物なかりき。余  
10 は道の東西をも分かず、思ひに沈みて行くほどに、行き合ふ馬車の馭丁に幾度か吐せられ、驚きて飛びのきつ。しばらくしてふとあたりを見れば、獣苑の傍らに出でたり。倒るるごとくに道の辺の腰掛けに倚りて、焼くがごとく熱し、槌にて打たるごとく響く頭を榻背に持たせ、死したるごときさまにて幾時をか過ごしけむ。激しき寒さ骨に徹すと覚えて醒めしときは、夜に入りて雪はしげく降り、帽のひさし、外套の肩は一寸ばかりも積もりたりき。  
15 もはや十一時をや過ぎけむ、モハビツト、

154 黒がねの額 鉄面皮。厚かましいこと。  
153 特操 常に守っているみさお。  
152 落ちるたり 安心した。  
151 寺に入らむ日 幼児の洗礼のために教会に行く日。  
150 襦袢 おむつ。産着。  
15 寸 長さの単位。一寸は、約三センチメートル。  
157 モハビツト ベルリン市北西の地域名。モアビツト。  
一（広漠）（心頭）

カルル街通ひの鉄道馬車の軌道も雪に埋もれ、フランデンブルゲル門のほとりの瓦斯灯は寂しき光を放ちたり。立ち上がりむとするに足の凍えたれば、両手にてさすりて、やうやく歩み得るほどにはなりぬ。

足の運びの抄らねば、クロステル街まで来しときは、半夜をや過ぎたりけむ。ここまで来し道をばいかに歩みしか知らず。一月上旬の夜なれば、ウンテル・デン・リンデンの酒家、茶店はなほ人の出入り盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えぬ。我が脳中にはただただ我は許すべからぬ罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき。

四階の屋根裏には、エリスはまだ寝ねずとおぼしく、炯然たる一星の火、暗き空にすかせば、明らかに見ゆるが、降りしきる驚のごとき雪片に、たちまち覆はれ、たちまちまた顕れて、風にもてあそはるるに似たり。戸口に入りしより疲れを覚えて、身の節の痛み堪へ難ければ、這ふごとくに梯を上りつ。庖厨を過ぎ、室の戸を開きて入りしに、机に倚りて襦袢縫ひたりしエリスは振り返りて、「あ。」と叫びぬ。「いかにかしたまひし。御身の姿は。」

驚きしもうべなりけり、蒼然として死人に等しき我が面色、帽をばいつの間にか失ひ、髪はおどろと乱れて、幾度か道にてつまづき倒れしことなれば、衣は泥まじりの雪に汚れ、所々は裂けたれば。

余は答へむとすれど声出でず、膝のしきりにをののかれて立つに堪へねば、椅子をつかまむとせしまでは覚えしが、そのままに地に倒れぬ。

人事を知るほどになりしは数週の後なりき。熱激しくて譫語のみ言ひしを、エリスが懇ろにみとるほどに、ある日相沢は訪ね来て、余が彼に隠したる顛末をつばらに知りて、大臣には病のことのみ告げ、よきやうに繕ひおきしなり。余は初めて病床に待するエリスを見て、その変はりたる姿に驚きぬ。彼はこの数週のうちにく瘦せて、血走りし目はくぼみ、灰色の頬は落ちたり。相沢の助けにて日々の生計には窮せざりしが、この恩人は彼を精神的に殺ししなり。

後に聞けば彼は相沢に逢ひしとき、余が相沢に与へし約束を聞き、またかの夕べ大臣に聞こえ上げし一諾を知り、にはかに座より躍り上がり、面色さながら土のごとく、「我が豊太郎ぬし、かくまでに我をば欺きたまひしか。」と叫び、その場に倒れぬ。相沢は母を呼びて共に助けて床に臥させしに、しばらくして醒めしときは、目は直視したるままにて傍らの人をも見知らず、我が名を呼びていたく罵り、髪をむしり、布団を噛みなどし、またにはかに心づきたるさまにて物を探り求めたり。母の取りて与ふるものをばことごとく投げうちしが、机の上なりし襦袢を与へたるとき、探りみて顔に押し当て、涙を流して泣きぬ。

これよりは騒ぐことはなけれど、精神の作用はほとんど全く廃して、その痴なること赤児のごとくなり。医に見せしに、過激なる心労にて急に起こりしパラノイアといふ病なれば、治癒の見込みなしと言ふ。ダルドルフの癲狂院に入れむとせしに、

158 カルル街 シュプレー川の北岸を東西に通ずる街路。カール街。

159 鉄道馬車 レール上を馬車で走り、人を乗せて運ぶ交通機関。馬車鉄道。

160 フランデンブルゲル門 フランデンブルク門のこと。

161 半夜 真夜中。

※ 人の出入り盛りにて賑はしかりしならめど、ふつに覚えぬ 人の出入りが盛んでにぎやかであったろうが、全く覚えていない。

162 炯然たる きらきらと明るい。

Ⅰ 「風にもてあそはるる」とは、何のどのような様子か。

163 おどろと ぼうぼうと。

164 人事を知る 意識を回復する。

Ⅱ 「余が彼に隠したる顛末」とは何か。

165 つばらに 詳しく。つぶさに。

166 聞こえ上げし 申し上げた。

167 ぬし 敬称で、様、さん、の意。

168 パラノイア 偏執症。精神障害の一種。体系的な妄想が存在するが、その他の点では人格の障害はない。パラノイアについては、時代・人によって見解が異なっており、この作品の当時は、今日より広い範囲の症状をさした。「ドイツ語」Paranoia

169 ダルドルフ ヘルリンの北約一〇キロメートルにある町。

170 癲狂院 精神病院。  
一（面色）二諾

泣き叫びて聴かず、後にはかの襦袢一つを身につけて、幾度か出だしては見、見ては歎歎す。余が病床をば離れねど、これさへ心ありてにはあらずと見ゆ。ただ折々思ひ出したるやうに「薬を、薬を。」と言ふのみ。

㊦「薬を」とは誰の薬か。

余が病は全く癒えぬ。エリスが生ける屍を抱きて千行の涙を注ぎしは幾度ぞ。大臣に従ひて帰東の途に上りしときは、相沢と議りてエリスが母に微かなる生計を営むに足るほどの資本を与へ、あはれなる狂女の胎内に遺しし子の生まれむ折のことをも頼みおきぬ。

ああ、相沢謙吉がごとき良友は世にまた得難かるべし。されど我が脳裏に一点の彼を憎むところ今日までも残れりけり。

一〈病床〉

●理解● (1)豊太郎はエリスと出会う前にどのような気持ちで暮らしていたか、まとめなさい。

(2)次の場面での、豊太郎とエリスの相手に対する心情はどのようなものだったか、それぞれ整理しなさい。

㉑ 二人の出会い      ㉒ 豊太郎の免官      ㉓ 天方伯の呼び出し

㉔ ロシア行き      ㉕ ロシアからの帰還

(3)次の表現における豊太郎の気持ちはどうなものか、考えなさい。

㉖ 一種の寒さ(二二七・13)      ㉗ 我が恥(二二八・3)      ㉘ 特操なき心(二三三・3)

(4)「かくまでに我をば欺きたまひしか」(二三五・10)というエリスの発言を踏まえて、エリスが倒れたのはなぜか、考えなさい。